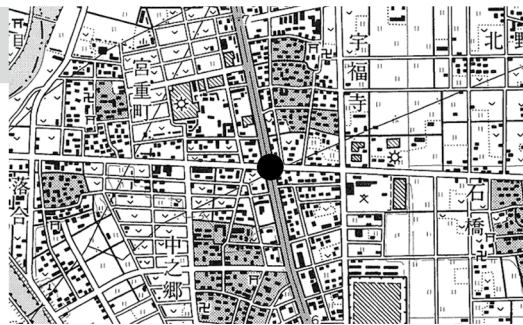


中之郷北遺跡

所在地	西春日井郡西春町中之郷地内
調査理由	県道高速清洲一宮線建設
調査期間	平成 13 年 10 月～平成 14 年 2 月
調査面積	2,400 m ²
担当者	石黒立人・鶴飼雅弘・早野浩二



調査地点 (1/2.5 万「清洲」)

調査の経過 中之郷北遺跡は、西春日井郡西春町中之郷地内に位置する。本遺跡の発掘調査は県道高速清洲一宮線の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査対象は橋脚部分のみ 12 工区、合計 2,400 m²で、国道 22 号線中之郷交差点の以北に A～E 区（B 区は B a 区と B b 区に二分割）の 6 調査区、以南に F～K 区の 6 調査区を設定した。調査期間は平成 13 年 10 月～平成 14 年 2 月である。

立地と環境 本遺跡は五条川左岸の自然堤防と後背湿地が複雑に入りくむ沖積平野に立地する。調査地周辺の現況は住宅地で、現地表の標高は 5.5m 前後を測る。遺跡の約 3 km 南には弥生時代の大集落として著名な朝日遺跡（清洲町・春日町・名古屋市）が位置するほか、約 2 km 北東には弥勒寺御申塚遺跡、弥勒寺廃寺跡（いずれも西春町）が、五条川を挟んだ約 2 km 北に今年度発掘調査を実施した伝法寺本郷遺跡（一宮市）、約 2 km 北西に中世を中心とする下津北山遺跡や鎌倉街道周辺遺跡（いずれも稲沢市）が存在する。また、交差点以南の調査地東には、すでに滅失した古墳時代後～終末期の古墳、宇福寺古墳が近接する。

調査の概要 今回の本遺跡の調査において、古墳時代初頭、古墳時代前期、古墳時代中期前半、古墳時代中期後半～古代、中世～近世の遺構と遺物が各層序ごとに連続して検出された。また、調査区を設定した範囲は南北約 350m に及ぶため、暗褐色粘土層（E～H 区）、褐色中粒砂層（C～H 区）、黒色粘土層（B a～H 区）を鍵層として、各調査区間の層序の対比を認識しつつ調査を行った。

古墳時代初頭・前期 B 区から H 区にかけて、標高 2.5m 前後に古墳時代初頭（廻間Ⅱ式が中心）の遺物を包含する黒色粘土層が安定して堆積していることを確認した。このうち B a、B b、C、H 区では黒色粘土層の直下で幅約 0.4m の平行小溝群が検出された。B b、C 区の平行小溝群は北東—南西方向で、それぞれの溝は 1.5m 間隔に配される一方、H 区の小溝群は北西—南東方向で、それぞれの溝の間隔は 0.5 m 前後とやや密となる。また H 区では、黒色粘土層の直上で古墳時代前期後半（廻間Ⅲ式後半～松河戸Ⅰ式前半）の土器集積を検出した。

古墳時代中期前半 黒色粘土層の上位には、青灰色シルト層と青灰色粘土層が互層状に堆積する。この層中で明確な遺構は確認されなかったが、標高 3 m 前後には古墳時代中期前半（松河戸Ⅱ式）の土器が包含されていた。これらの土器群は出土した層位によって概ね二分される。土器の出土は散漫ではあるものの、S 字甕、小型壺、大型高杯、手捏ね土器など全形を知りうる個体の出土が目立つ。H 区や B b 区では、土器がやや集中して出土する地点もみられ、B b 区では轆の羽口が土器群に共伴して出土した。

なお、I 区では古墳時代中期後半～古代の遺構面の下位で、緩やかな谷状の落ち込み

(NR 01)を確認した。NR 01では古墳時代中期の土器群のほか、赤色顔料（ベンガラ）や有袋鉄斧といった特殊な遺物の出土がみられたことから、今後、遺構の性格を慎重に検討する必要がある。

古墳時代
中期後半～古代

D区からF区にかけて、青灰色シルト層の上位、標高3.5m前後で褐色中粒砂によって埋没した水田を検出した。とくにF区では幅0.5m、高さ10～20cmの大畦畔を良好な状態で検出することができた。

その水田を埋没させた古墳時代中期以降の沖積作用は、D区周辺、H～I区周辺に自然堤防状微高地を形成し、本遺跡周辺においても集落形成が本格化する。D区とI区では同一遺構面（標高約4.0m）で、古墳時代中期後半～奈良時代後半の竪穴住居がそれぞれ8棟、10棟と濃密に検出された。これらのうち、I区SB07、SB10では古墳時代中期後半（宇田Ⅱ式）の土器群が出土していることから、集落形成の開始をこの段階に求めることができよう。なお、SB07では体部に円窓（焼成後）を穿った須恵器有蓋高杯が床面に伏せられた状態で出土した。飛鳥時代以降の竪穴住居には竈が付設されており、D区SB03では花崗岩を利用した石製支脚がともなっていた。さらにH区では暗褐色粘土層の上面で、微高地縁辺において北東—南西方向の平行小溝群を検出した。溝の幅は0.4m前後、それぞれの溝の間隔は0.3～1.0mを測る。集落近郊に営まれた畠であろう。

一方、A区とBa区は旧河道に相当し、A区では河道にほぼ平行する杭列を確認した。構造を知りえたのは杭列のみであったため、旧河道との対応関係には不明な点が多く残されるものの、護岸を目的としたものと考えられる。A区の河道内からは土師器甕、須恵器蓋杯、高杯、甑、甕、土錘など古墳時代後期～飛鳥時代の遺物のややまとまった出土をみた。

中世～近世

I区では竪穴住居群の上位で柱穴群が検出されたことから、I区の周辺では古代以降にも集落としての土地利用がなお継続していたことがうかがわれる。その他の調査区では中世以降、高燥な土地には島畠が、低湿な土地には水田が広がる景観へと移行する。

ま と め

今回の調査において、尾張平野における古墳時代から古代にかかる遺跡の形成過程、地形環境の変遷をつぶさに跡づけることができた意義は大きい。しかし一方で、現地表下3mにおいて古墳時代の遺跡が広範に展開するという予期しえなかった事実は、沖積低地に眠る遺跡の分布状況の把握の困難さを改めて我々に思い知らしめる結果となった。このような遺跡の存在をいかにして周知し、開発行為に対応するかが今後の重大な課題となる。

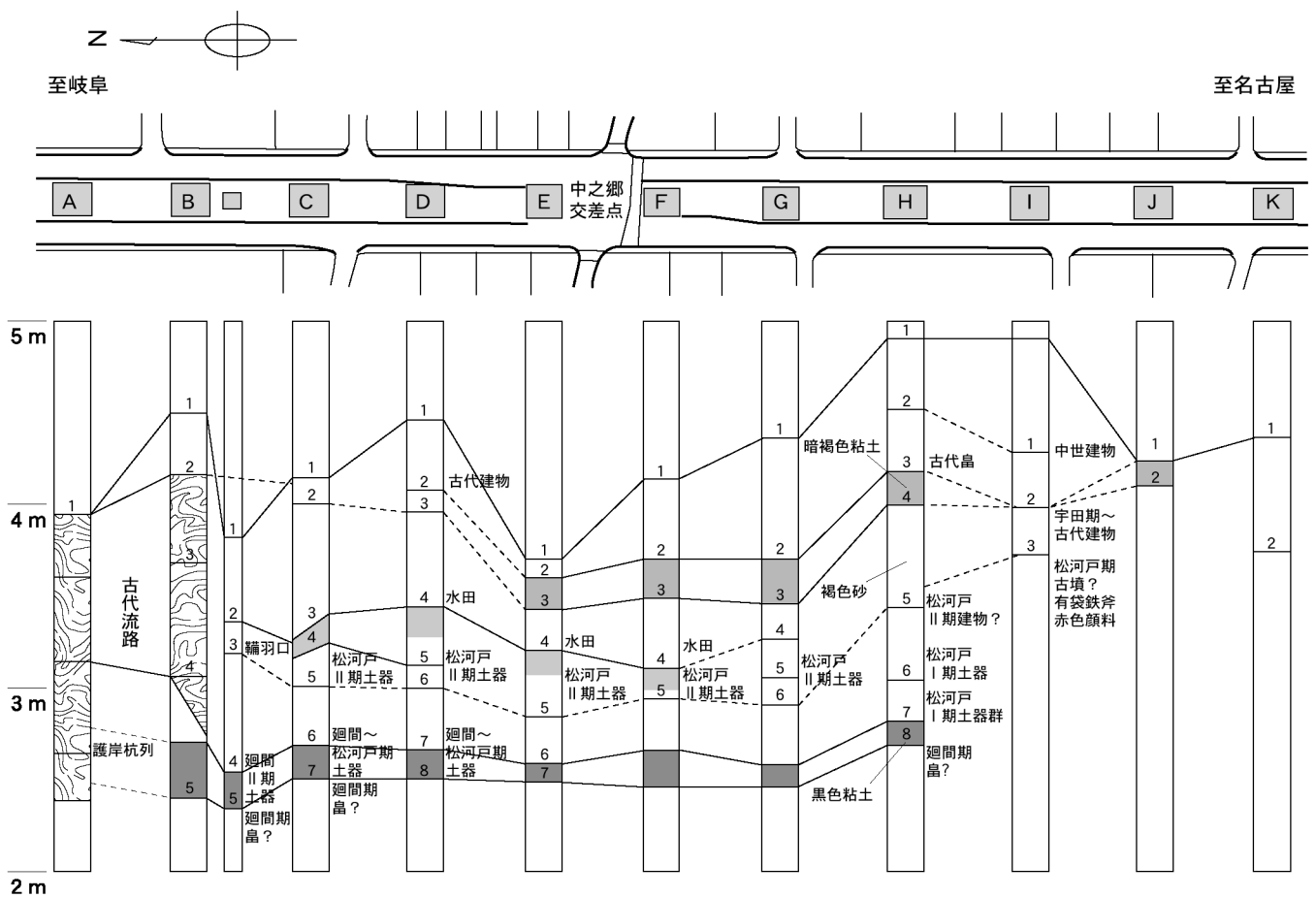
（鵜飼雅弘・早野浩二）



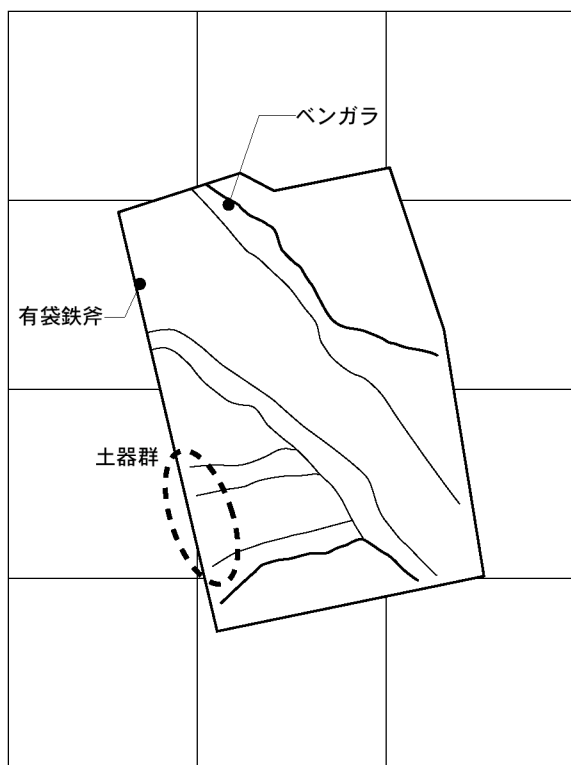
C区 調査風景



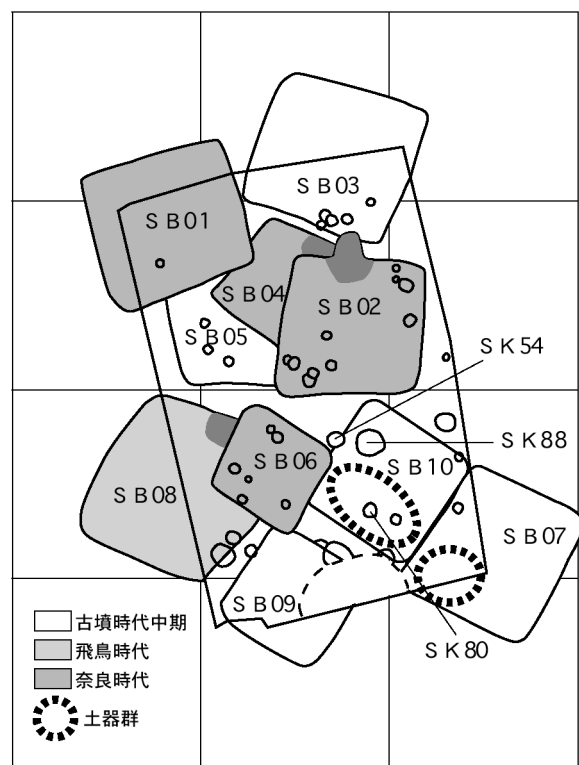
D区 土層断面



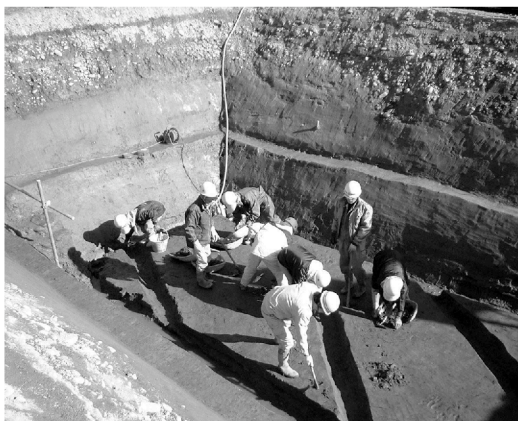
調査区配置図 (1:2000) と土層中柱図 (1:40)



I 区 古墳時代中期前半の遺構 (1:200)



I 区 古墳時代中期後半～古代の遺構 (1:200)



C区 平行小溝群



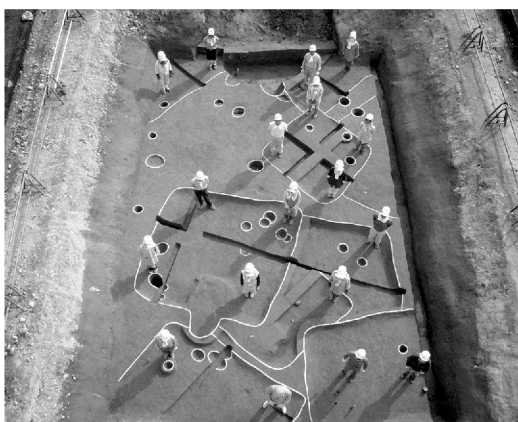
H区 土器集積



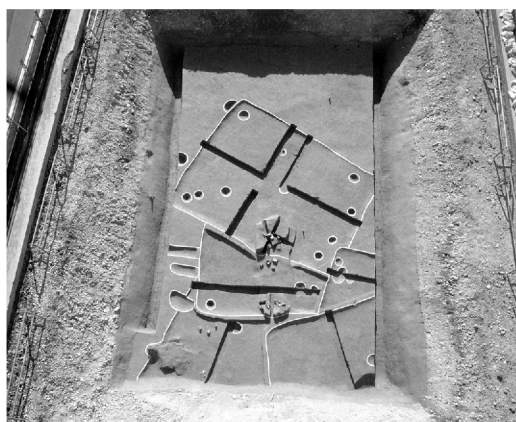
E区 土師器大型高杯



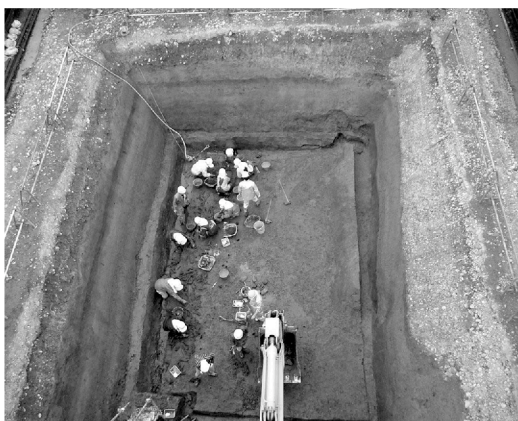
F区 水田と大畦畔



I区 竪穴住居群



D区 竪穴住居群



A区 自然流路と杭列



H区 古代平行小溝群